



忘れたいのに忘れられない、忘れようとしても忘れようのない、あの秋の日から、五年という月日が流れて、今年もふたたび秋がめぐってきた――。

カレンダーを一枚めくって、十月が始まったとたん、朝夕がぐんと冷えこむようになった。

表通りのいちよう並木は、日ごとに太陽の色に染めあげられ、庭のかたすみでは菊のつぼみがふくらみ、家の裏手にある林のなかでは、しまりすたちがどんぐりを集めながら、走りまわっている。

きょうは月曜だから、図書館の仕事は休み。

夏子は、妹の秋子といっしょに使っている部屋で、ばねのこわれている古い椅子に腰かけて、背中を丸めて一心に、原稿用紙に向かっている。

秋子は中学校へ、末の妹の冬子は小学校へ、姉の春子はふゆこ買物に出かけていて留守だ。

朝から清書を始めて、今はお昼過ぎ。

きょうのランチは抜きでいい。

夏子にとって、目の前の原稿は、食事よりもたいせつなものなのだ。机のまわりには書きそんじた原稿用紙が、机の上には消しゴムのかすが散らばっている。

「ふーっ」

とひとつ、大きなため息をついてから、夏子は窓の外に目を向けた。秋の空は、やさしい水色をしている。遠くにひつじ雲が浮かんでいる。網戸から、風がきんもくせいのかおりを運んでくる。

残りはおと一枚だ。あと一枚で、完成させられる。